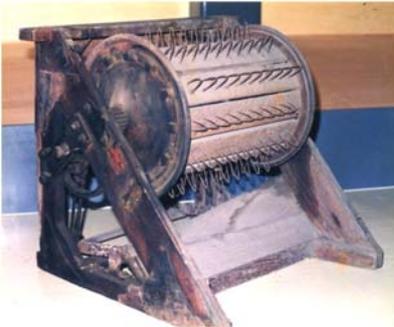


古い道具と昔のくらし

のうぎょう りんぎょう うんゆ
～農業・林業・運輸などをささえた
たくさんの道具たち～



大館郷土博物館

のうぎょう つか 農業に使われた道具（土づくり）

17世紀にかたちづくられた大館地方の農業の姿は、20世紀中頃あたりまで大きく変わることはありませんでした。農業を根本的に変えたのは、昭和30年代に入ってから農業の機械化でした。ここでは、機械化する前に使われた道具をいくつか紹介します。

鍬（クワ）



鋤（スキ）



クワは、引いて使います。
スキは、押して使います。

やく
約64.0×14.0(cm)

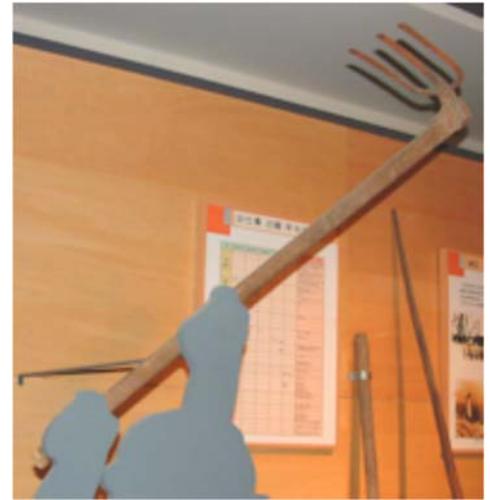
農具の1つです。普通は幅の広い刃にまっすぐな柄をつけ、押しこむ力と手の力による土の反転とを利用して土壌を耕すものです。

備中鍬（ビッチュウクワ）

くわぶ
鍬部31.0×18.0(cm)

えぶ
柄部124.0cm

乾田や粘土質の田んぼを深く耕す鍬です。刃が三つ刃になっており、一枚刃の鍬より軽量で土が付きにくいのが特徴です。



柄部 125.0cm

ふるぶ
風呂部22.5×11.0(cm)

さき部 34.2×11.5(cm)

たはた
田畑を耕すほか、
ちゅうこう じよそう あぜ
中耕・除草・畦作りなど
かくしゆ さぎょう もち
各種の作業に用いる
のうぐ
農具です。

マンガ（馬くわ）



約 35.0×162.0×64.0(cm)

田植え前に「すき」を使って、おおまかに耕した後、すきでは砕けなかった土のかたまりを砕き、田を平らにする道具です。牛や馬にひかせます。



馬耕 (ばこう)

犁身 (スキミ)
約 130.0×8.0×17.0(cm)

犁ながえ
約 123.5×9.5×9.5(cm)

犁さき～犁へら
約 47.5×17.0(cm)

畑を耕す特製の犁 (スキ) です。馬にひかせて耕します。

ツキイタ

おおいた
大板154.0×13.0×1.4(cm)

こいた
小板12.3×6.3×1.5(cm)

底の部分は大板2枚と小板2枚を組み合わせています。苗代づくりの最終段階に足跡などをつぶして水底をならすのに使われました。



クロツケ



クロキリ

180.0×12.0(cm)

クロ (畦) の草切りをする道具です。



39.5×26.0×103.0(cm)

クロ (畦) に泥をこねたものを付けて、整えるための道具です。

のうぎょう

農業に用いられた道具（田植え・除草）

土づくりが終わり、苗が育てばよいよ田植えです。そして、苗を植えた後は大きく実るようにこまめに除草を行いました。



なえはこ おけ
苗運び用桶・苗ハコビ



(左) 苗運び用桶・・・苗を背負って運ぶための桶です。

(右) 苗ハコビ・・・組手に棒を通して二人で運びます。とても大きいので、一度にたくさん苗を運ぶことができました。

カタ

266.0×52.0×52.0(cm)

田植えの時に、苗を植える目印をつけるための型どりの道具です。「カタワク」「ゴロ」などとも言います。目印に合わせて、手で植えていました。

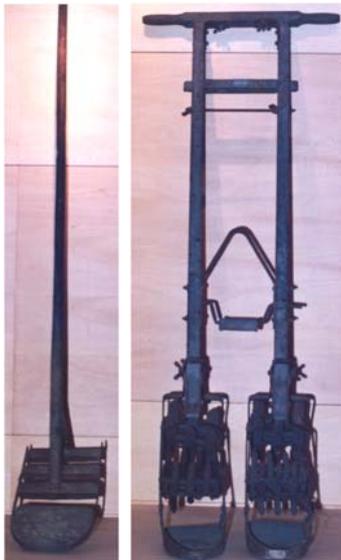


くさかりがま
草刈鎌



えぶ
柄部2.5×45.0cm
は
刃18.0×5.5(cm)

じょそうき
除草機



(左)

柄172.0cm

フネ部45.0×23.0(cm)

手で持って引いて使います。

(右)

持手51.5cm

柄 110.0cm

フネ部 56.0×14.0(cm)

手で押して前に進んでいきます

除草機が登場したことにより、しゃがんで草取りをする必要がなくなり、かなり楽になりました。

のうぎょう だっこく 農業に用いられた道具 (脱穀)

収穫を終えたら、穂から粒(実の部分)を取り除く「脱穀」を行います。とても大変な作業でした。



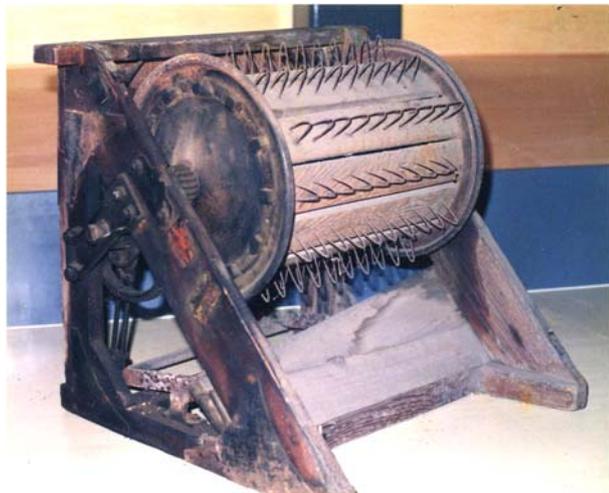
せんば
千歯こき

49.0×60.5×31.0(cm) 歯数22本

歯の部分に刈り取った稲などの束を引っかけてから抜き取ることで穂から粒をとります。

それまでは「扱き箸」とよばれるもので穂をはさんで作業していたため、千歯こきの登場で束ごと一気に作業できるようになり、効率が大幅にアップしました。

あしぶ だっこくき
足踏み脱穀機



73.0×73.5×64.5(cm)

逆V字型の針金が円筒形の扱き胴とよばれる部分についています。この部分を足で板を踏むことにより回転させます。そして、回転している部分に稲などの束を押しつけることで脱穀します。

足で板を踏むことで扱き胴が連続回転するため、作業効率がさらにアップしました。



マドリ

乾燥させた大豆、小豆、胡麻などを叩き落とすための道具です。二又や三又になっている自然の木を利用しています。



カラミボウ

豆の殻などを外すときに使われました。

のうぎょう
農業に用いられた道具 (選別)

せんべつ

脱穀を終えたら、実とゴミ、よい実とそうでない実などを分ける「選別」という作業を行います。

箕 (ミ)



102.0×71.5×17.0(cm)

穀物を入れ、あおってその中の殻・ゴミなどをふるい分けるものです。動かした方にコツが必要でした。

トウシ



直径 62.0×15.5(cm)

粃を中に入れ、両手で持ってふるいます。粃はふるいの目から下に落ち、ゴミがふるいの中に残ります。

唐箕 (トウミ)



54.0×168.5×134.0(cm)

米・麦など良い粒に混ざったくず粒・ちりのようなゴミを選り分ける道具です。

上の箱から入れて、ハンドルを回して風を起こすことで、手前には良い粒が落ち、その次にくず粒、左の出口からはゴミが出る仕組みになっています。(重さの違いを利用して利用しています。) 中国から伝わったと言われています。

万石 (マンゴク)



193.0×60.0×138.0(cm)

ふるいの機能をさらに発展させたものです。網の傾斜を滑り落ちる時に小さいものは下に落ち、大きいものは下までたどり着いて箱にたまる仕組みです。傾斜の角度の調整には経験と技が必要でした。

スルシ



粃がらをとるための臼です。臼は上下に分かれていて、上を回転させて使います。

のうぎょう

農業に用いられた道具 (飼育・加工)

しいく

かこう

牛や馬は、農作業の大切なパートナーでした。また、ワラを使って農家は様々なものを自分たちで作っていました。

くわ
鍬 (ニホンカギ)



ぜんちょう
全長 141cm

はぶ
刃部 19.5×13.5(cm)

うまごや たいひ あつ
馬小屋の堆肥を集める先
が二本に分かれた鍬です。

ハミオケ



56.0×46.0×36.0(cm)

かいぼ しりょう
飼葉 (牛・馬の飼料と
する乾草など) を入れ
て、牛・馬に食わせる
ための桶です。

ハミキリ



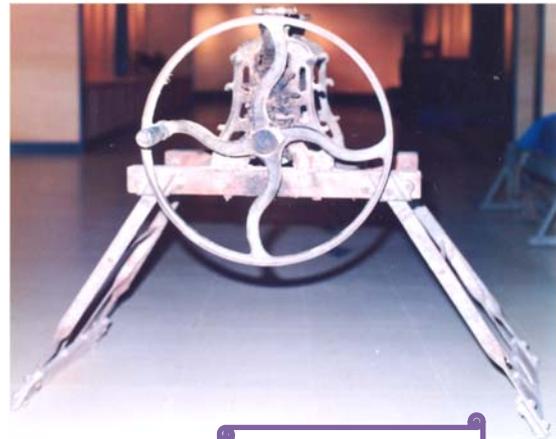
63.0×12.5×21.5(cm)

飼葉を切り刻むための道具です。

うき
ワラ打ち機

112.0×79.0×85.0(cm)

なわ かこう まえ やわら
ワラを縄などに加工する前に柔らか
くする機械です。ローラーのあいだ すうかい
とお
通して柔らかくしました。



ナワナイ機



132.0×62.0×101.0(cm)

農家では農作業などで使う縄を日ごろから
作っていました。ワラを足踏みで回転させなが
らより合わせて縄をなっていく仕組みです。

コモアミ



97.0×45.0×19.0(cm)

ワラなどを使ってコモを編む道具で
す。織ったものを苳 (ムシロ), 編んだも
のを菰 (コモ) といっていました。

糸を作る時に用いられた道具など

自給自足で生活することの多かった昔（60年くらい前）、農家では木綿などを栽培して糸を作り、自分たちの衣服を作っていました。（木綿の他には、麻や絹などがありました。）

糸車（いとぐるま）



綿から糸を紡ぎ出したり、紡いだ糸をより合わせたりする道具です。
手で車を回転させるので、「糸繰車」とも呼ばれます。

地機（じばた）



67.0×130.0×83.0(cm)

糸を織り上げて、織物にしていくための機械です。

りんぎょうもち 林業に用いられた道具

大館の林業の歴史は古く、16世紀末に豊臣秀吉の命を受けた造船や城作りのために秋田杉が使用されていました。

江戸時代に入ってから、佐竹氏が秋田杉の保護育成に努め、江戸や大坂（大阪）といった最大の木材消費地で最高の評価をもって受け入れられました。

明治以降から現在にいたるまで、特に長木沢と矢立の杉林は日本三大美林のひとつとして、国有林育成の手厚い営林事業が行われてきました。

ここでは、林業で用いられた道具をいくつか紹介します。



手斧（チョウナ）



ぜんちよう はぶ
全長58cm 刃部12.0×12.0(cm)
もくざい あらげず
木材を粗削りしたものを平らにするのに使います。

こび のこぎり
木挽き 鋸



ぜんちよう はば
全長 87.0cm 刃の長さ 57.8cm, 幅36.5cm
まるざい いた ひ わ
丸材を板に挽き割るタテビキのものです。

マドノコ



ぜんちよう
全長 106.5cm 刃の長さ 67.0cm, 幅 21.3cm
たいぼく ばっさい
大木を伐採するときに使われました。

こび のこぎり
木挽き 鋸（オオノコ）



ぜんちよう
全長 84.3cm 刃の長さ 59.0cm, 幅 15.6cm
たちき
立木の伐採や丸材にするときのタテビキの
ものです。

こび のこぎり
木挽き 鋸（オオノコ）



ぜんちよう
全長 90.5cm 刃の長さ 57.5cm, 幅 15.5cm
立木の伐採や丸材にするときのタテビキの
ものです。

りょうび のこぎり
両挽き 鋸



ぜんちよう
全長 163.6cm 刃の長さ 92.3cm, 31.2cm
ちよっけい とくだい
直径の特大的なものや材質の固いものを二
人で挽くときに使います。

運輸（うんゆ）に使われた道具

今では、自動車じどうしゃが一般的いっぱんてきですが、道路どうろの整備せいびが進み、自動車じどうしゃが交通手段こうつうしゅだんとして台頭たいとうしてくる1960年代ねんだい（昭和30年代）あたりまでは、雪が降っても今のようにしっかりと除雪じよせつしていなかったため、大きいものを運ぶには「馬そり」を、小さいものを運ぶには「箱ぞり」を使用していました。

そり



ぜんちよう
全長185.5cm
そりの長さ147.5×51.3×21.0(cm)
手の長さ65.2cm, 手までの長さ78.5cm

88.0×40.5×20.5(cm)



はこ
箱ぞり



145.0×93.0×18.5(cm)

70.0×51.0×67.2(cm)

台木だいぎの上に箱をつけたそりです。

大きさは、大人一人が乗れるくらいが一般的ですが、子ども用のものもありました。

馬そり



ぜんこう
全高278.0×96.0×120.0(cm)
にだい
荷台191.0×96.0(cm)



馬の毛ぐし



毛をとかすのに使いました。

くら
鞍などの馬具ばぐをつけると
こんな感じになります。